

經濟論叢

第 166 卷 第 2 号

商業・富裕と徳の変化……………田 中 秀 夫 1

国保保険料(税)賦課政策と
被保険者負担 (2)……………小 松 秀 和 17

外国為替市場の不安定性についての分析……………國 枝 卓 真 32

ヴェルテンベルクにおける
編物産業内の社会的分業の展開 (1)……………森 良 次 51

倫理的行動の正当化……………山 根 卓 二 67

平成12年 8 月

京 都 大 学 經 済 學 會

商業・富裕と徳の変化

——ジョン・ミラーの経済思想（3）——

田 中 秀 夫

I は じ め に

筆者はこれまでミラーの経済思想を追って、『英国統治史論』（第2版，1803年）第4巻第5章までを検討したが，本稿では第6章を検討してみたい。第6章は「一国民に与える商工業の影響，富裕と文明の影響」がテーマである。100ページを越える本章はミラーが力を注いだ論説であって，歴史的視野に立って緻密に構成された「勇気と忍耐」，「真面目と節制」，「正義と寛大」の3節からなっている。ミラーの道德論¹⁾をなすその内容はきわめて興味深いものがある。なぜミラーはこのようなトピックを選んだのだろうか。その理由についてミラーは次のように語っている。

「人間の性質と行動は彼が置かれている境遇と彼特有の教育と生活習慣の影響を受けがちである」という命題を否定する人はほとんどいない。しかし「この影響力がどこまで及ぶか，また未開国民と文明国民の道德の間にどんな差異があるか」は容易に決定できない。「この事実はその重要さにふさわしい公正さと慎重さで検討されたことはほとんどない，とわたしは確信する。」（174ページ）

この発言は重要である。多分にレトリック気味ではあるが，もしミラーの言

1) ミラーは法学教授として法学を講義するに先立って，しばしば道德を取り上げた。1794年の公法論講義におけるミラーの道德論（倫理学）は，これまでの道德学説，とりわけハチスン，ヒューム，スミスの説を解説した上で，批判的に継承する自らの見解を述べている。田中[1999]補論を参照。

葉を額面通り受けとってよいとすると、生活様式と道德の関係についての、これまでの哲学者の見解は、ミラーにとって必ずしも満足できるものではなかった。その理由をミラーはこう述べている。道德と宗教について書いた著者は、その主題を風刺や毒舌の文体で扱うのがよいと考えてきた。自らの時代の悪徳を非難して、彼らは昔の美質を褒め称えた。ここではミラーはヒュームもスミスも意識していないように思われる。

とりわけミラーが意識しているのはルソーである。「最近のある有名な著者は、最初是一般向けの論考で、また後には長編の本格的な論文で、未開生活はすべての徳の親であり、人間の悪徳は富裕と文明の固有の独特の子孫であるとまで主張した。」著者がルソーであることは明らかであるが、それを明示する注が付けられており、それは編者クレイグの注かもしれない。前者は『学問・技芸論』(1750年)、後者は『人間不平等起源論』(1755年)を指すと思われる²⁾。

こうした逆説的な意見を論駁する代わりに、「実践道德に与える貧困と富、単純と洗練の影響」を調べ、「社会の異なる時代の支配的な徳と悪徳」を比較するというのが、ミラーのアプローチである。そうすれば、大ブリテンの商業の改善が国民の道德にもたらした影響と、この影響がどの程度国民の政治状態を左右したかを、解明できるであろう。洗練された国民と野蛮な国民の習俗＝生活様式の最大の差異は、勇氣と忍耐、真面目と節制、正義と寛大さにある。こうしてミラーは、この3つのトピックを詳論する。

第1節「勇氣と忍耐」(Courage and Fortitude)は、紹介したことがある(田中 [1996] 138-155ページ)ので、簡単な要約で済まそう。未開民族では忍耐が優位する。遊牧と農耕は勇氣を増進させる。商工業の発展と富裕は、安全

2) ルソーがスコットランドの知識人にどう説かれたかは興味深いことがらであるが、スミスの「エディンバラ評論編集者への手紙」が象徴するように『人間不平等起源論』が最も注目され、『社会契約論』(1762年)は余り注目されず、『エミール』(1762年)もケイムズやモンボドを除けばそれほど反響をよばなかったように思われる。文明を鋭く批判、告発するルソーのレトリックは注目されたとしても、今ようやく文明の恩恵を味わいつつあったスコットランドの知識人は、爛熟したフランスの宮廷文化を眼前にして、文明、学問や技術を否定したルソーの見解には概して批判的であった(田中 [1991] 第6章を参照)。加えて1760年代後半のヒュームとルソーの関係の破綻によって、悪人ルソーという評判が広まったことも影響したかもしれない。

で安楽な暮らしを可能にするから、勇気と忍耐をともに衰退させる。したがって、文明社会では民兵軍を維持することは困難となり、常備軍の導入を必然化するが、しかし富裕は国民に財産とともに自由をもたらすから、専制政治に対しては、国民が抵抗するであろう。以上が第1節の要点である。

第2節「真面目と節制」(Sobriety and Temperance)については詳しく論旨を見ておこう。

II 飢え、渇きと飲酒

ミラーは、次のように論じ始める。人間の行動の動機は二種類ある。快適なものを得ようとする欲望と、苦痛・不快を避けようとする欲望である。近くの快は遠い快より強い印象を与えるので、目先の快に溺れがちであるが、そうなると、より重要な将来の幸福を犠牲にすることになる。

節制の徳は、それぞれの快楽をバランスさせ、下位の快楽が上位の快楽の地位を奪うことのないようにして、こうした害を矯正する。忍耐は苦痛と不快のバランスをとることで自制する別種の徳である。

行動を最も攪乱する最も激しい欲求は、飢えと渇き、および性欲である。節制の徳がまず発揮されるのは、この二つの欲求の行き過ぎの規制である。

1 食欲：必要と洗練

食欲はすべての国で異なった様相を示すし、その満足は食糧の多寡によって異なる。規則的に食料を得られない、自然の恵みに依存している未開の貧しい国民は、しばしば、極端な飢餓にさらされる。幸運にも沢山の食糧を得たときは、過度の暴食をしがちとなる。このような惨めな状態の人間は、長い禁欲に耐えられる肉食獣に似ている。

生活資料の貯えを可能にする技術は、人間を注意深くし、将来に備えさせる。飢えの苦痛にさらされた彼らは、すぐに使わない食糧を貯えることを思いつく。生活必需品を増やし蓄えるこうした改善の緩慢な漸次的進歩から、人間の活動

は第一に日々の食糧の獲得をめざすようになり、長期間の食糧の不足が彼らの主な心配となる。したがって、節約は初期時代には無くてはならない資質であり、浪費は悪徳であった。かなり富裕になったヨーロッパの諸国民にこうした原初的な思考様式の痕跡が見られる。その痕跡とは生活に役立つものを捨てることは、神の怒りを招くとみなされていることである。

商工業による富の普及から、上流と中流階級の間では規則的な豊富な食糧の供給が実現し、稀少性の観念が追放され、生活様式の完全な変化が起こった。食事の意味は必要から洗練に変化した。上機嫌が生み出す味覚の満足と自然な陽気に社交の快楽が加わる。心身の能力が優雅な快楽に寄与するものと期待される。この種の娯楽は誰にも楽しめるので、普遍的な性向になり、この性向は習慣で強められ、富の顕示と結びついて虚飾と虚栄の源泉となる（顕示的消費）。それはあまりに過度になると重要な仕事や人々の注意をそこなうようになり、個人の財産を破壊することになる。

2 渇き：飲酒

次に渇きであるが、自然は惜しみなく渇きを癒すものを与えた。しかし、最も未開な社会でも人類は水で満足せず、すでにある種の奢侈である酒をつくり出した。ミラーは少し詳しく飲酒について論じている。

酒は時代と地域を問わず造られた。貧しい未開人は退屈で憂鬱な時をすごさざるをえないが、酒の陶酔が自らの惨めさを忘れさせてくれる。人身売買を行うヨーロッパの商人は酒の魅力を熟知していて、一瓶の酒で未開人から妻や子供を買ったり、未開人を焚き付けて隣人を誘拐させたり、多数の捕虜を生み出す血腥い戦争に駆り立てるのである。酒は一国に浸透すると根絶は容易でない。「野蛮人の間ではどこでも目立っている酔っ払いの悪徳は、すぐには無くならない。もっとも、文明が進むと少しは変化し、規制される。」(p. 207)

ミラーは文明社会での飲酒について、上流階級と下層階級を分けて論じる。上流階級では酒は会話を活気づけ、楽しい気分を生み出し、批判を穏やかにし、

社交を滑らかにする。親切な感情をかき立てたり、普通の友達を親友にしたり、寛大さと仁愛で心を満たしたりすることも可能で、自分の欠点を徳の外観で飾ることができる。しかし、度が過ぎると、尊大な感情、憤慨、不和を呼び起こす。「控えめな美の三女神はバッカス酒神の酒宴から飛び去り、浮かれ騒ぎと乱痴気、粗く激しい論争、根拠のない無意味な口論、時折ではあるが致命的な口論が続く。」(pp. 208-209)

下層階級、労働者にとっては酔っ払いはいより有害である。「酒の陶醉は、彼らの骨折りと配慮を癒す慰安物となる。したがって、彼らの苦痛をともなう努力によってどの身分の繁栄も根本的に支えられおり、社会の残りの者が安楽かつ豊かに暮らせるようにしてくれている、その階級の人々にこの陶醉の慰めを全面否定するような厳格な厳しさに対して、わたしたちの同胞感情は反対するに違いない」(p. 209)と述べながらも、ミラーは次のように言う。すなわち、過度の飲酒は労働貧民を不幸にし、インダストリーと家庭への注意をすべて破壊し、気晴らしと放蕩に直行させるので、「真面目さ」あるいは「節制」が下層民の主な徳とされてきたのは正しい。

次にミラーは飲酒と風土の関係をとり上げ、風土説を部分的に認めるが、それ以上に社会的要因を重視する議論を展開しており、この点で、ミラーはこのトピックにかんするモンテスキューより、ヒュームに近い立場に立っている³⁾。

3) 風土論において決定的な作品はアール・ヌーヴォーの『気候の影響』(1733年)であって、モンテスキュー自身もこれを読んで強い影響を受けたとされている。モンテスキューの『法の精神』(1748年)の風土論は、周知のように活発な論争を引き起こした。ブリテンではジョン・ブラウンが『習俗と時代の原理』(1758年)において風土とイングランドの自由な政体に関係づける理論では自分がモンテスキューより先行していたと主張したり、ボリングブルックが『愛国者土』(1738年)においてどこにでも適用できる普遍的な政治原理等は存在しない理由として風土による差異にふれていたことが知られている。その後、ブリテンではヒューム、ジョージ・ウォレス、ファルコネ、ダンバー、トマス・グレイ、ゴールドスミスなどによって論争が継続された(さしあたり Fletcher [1939] pp. 94-101)。風土という物理的(自然的)原因が人間の性質や行動、したがって社会を根本的に制約し、決定しているという見解をモンテスキューは押し出したが、ヒュームをはじめとして文明、学問と技術・芸術の発展が人間精神を成長させ、社会を根本的に変容させてきたという歴史発展の視座をもつ多くの啓蒙思想家は、モンテスキューに反対し、道徳的(社会的)原因が人間の精神と行動に与える影響を重視する社会哲学、文明社会史を説くことになっていく(Berry [1997] pp. 77-88)。根本的な争点は、神による人間の運命の決定論をノ

ミラーはこう論じる。すなわち、飲酒癖は「物理的原因」により、寒い気候で目立つと考えられたきたが、それは北部ヨーロッパの人々の生活様式に基づく意見である。しかし、この地方は土地の性質と寒冷な気候のために、農業と一般の生活の仕方や技術の上で非常に不利だということを銘記すべきである。極寒の地での未開な生活はきわめて厳しいので、飲酒の陶醉に頼る必要がある。そこでは改善の進歩も遅いし困難なので、激しい飲酒が習慣として長く続いてきたのである。しかし、世界史を見れば、飲酒が寒冷な風土に限られないことは明らかである。こう述べて、ミラーは古代のギリシャ人、ガリア人、現代のスペイン人——「愉快な小説『ジル・ブラス物語』⁴⁾では、マドリードの立派な紳士が夜通し大酒を吞んで、千鳥足で朝帰りする様が述べられている」(p. 211)——、古代ペルシャ人を例として挙げるとともに、宗教上の理由で葡萄酒を飲めないトルコ人は代用に阿片を使っていると指摘する。ミラーはモンテスキューの風土論批判として有名な、ヒュームの論説「国民性について」を注記して、そこに挙げられた事実を参照するように指示している⁵⁾。

このように道徳的＝社会的原因をより重視するミラーは、学問と技芸がある程度進歩した後には、飲酒に耽る道楽は駆逐できると主張する。すなわち、知識の発展は、少なくとも上流と中流の階級では、持続的な楽しみを生み出す思想の基盤となるし、憂鬱と落胆の強力な矯正手段となる。想像力と反省能力から絶えず楽しみを得られれば、精神を高め、会話を活性化するために陶醉に頼る必要はなくなる。趣味が発展すると酒のもたらす粗野な歓楽と錯乱の大騒ぎ

、打倒し、人間の自由を樹立することにあった。神による決定に代わって自然による決定を押し出すことも事実として疑わしかったし、また人間の自由の拡大を求める啓蒙の理念にとっては容認することはできなかった。そして今や文明史家は、そのような神や自然の力に反抗し、また支配者の専制とも闘って、人間が自由を樹立してきたという事実を歴史に析出できるようになった。ヒューム、スミス、ミラーの文明社会史の画期的な意義はここにある。

4) Gil Blas, Le Sage 作のピカレスク小説 (1715-1735年)。

5) Hume [1994] pp. 90-91. ここでヒュームが挙げている例は、古代ガリア人、古代ギリシャ人、ペルシャ人、アフリカの黒人である。ヒュームはまたワインをスペイン人は身体を温めるために冬に飲むが、フランス人とイタリア人は消耗した生気を回復するために夏にしか飲まないと述べている。スコットランド啓蒙における社会の多様性と物理的原因、道徳的原因との関連についての議論の概要については Berry [1997] pp. 77-88 を参照。また坂本 [1995]。

を不快に思うようになる。それには酔いが醒めてからの精神の落ち込みと身体的不快感がたいがい伴うからである。彼らはグラスを手にしても、理性と優雅な会話が乱れるほど深酒はやらない。こうして、「酒の使用は社交の礼儀正しい楽しみに従属するようになり、食事の最も学ぶべき奢侈としての上機嫌の一部となる。」(p. 213)

文明社会では、少なくとも中上流階級においては、知識と学問が喜びの源泉となるというこの分析は、歴史的に比較的新しいものであって、知の大衆化とまでは言えないとしても、その方向での拡大に注目し、その傾向を積極的に評価する興味深い先駆的分析である。言うまでもなく、すでにブリテンではアディソン、スティールの『スペクテーター』のような「洗練」が売り物の新聞や雑誌が広く読まれていた⁶⁾。よく知られているように、ルソーは学問・技芸を人間に隷従を好ませるものとして退けるというパラドキシカルな立場をとった。それに対して労働と技術が下層階級に人間らしい感情と快活な喜びを与えるという分析を行ったのはヒュームであった。ミラーはルソーのレトリックを退け、このヒュームの分析を余暇に恵まれた中上流階級に適用したと言えるかもしれない。スミスに「喜びとしての学問」という観念があるかどうかは、検討の余地がありそうである。

上述のような飲酒の害は、商工業が発展し、知識と学問が快をもたらすことによって克服できるという傾向については、「ブリテンおよび関係諸国での生活様式の変化」が例証になる。イングランドでは上流階級の過度の飲酒はほぼ無くなった(ミラーの指摘にはないけれども、下層階級についてはホガースの「ジン横丁」を想起してもよいだろう)。スコットランドではまだ節制は不十分であるが、他の改善でもこの点でもイングランドを急いで追いかけている。アイルランドの住民が古来の習慣を墨守しているのは、技術全般が未発展なためである。下層階級は依然として飲酒に支配されているが、インダストリと節儉の習慣が浸透し、上位者の作法の影響を受けることから、自らの利益になら

6) さしあたり Bloom and Bloom [1971] を参照。

ないこの悪習をやがて矯正するという希望をもってよいであろう、とミラーは楽天的見解を述べている。

III 性欲：放縦と節制

以上のような飲酒論の次に、ミラーは男女関係における節制の徳を、三段階に分けて取り上げ、詳細に論じている。第一に、初期の粗野な国民の相貌、第二に有益な技術の発展、財産の獲得と拡大、統治組織の進歩から生じる社会の姿、第三に優雅な技術の高度な開発と巨大な富が生み出す社会の姿である。このトピックは『階級区分の起源』の第1章、「女性の境遇の歴史」で包括的に展開された議論（田中 [1999] 第2章を参照されたい）の一部に相当する。時代の制約を受けていたとはいえ、ミラーが当時としては、先駆的な女性の地位の向上と自由を展望した思想家であったことは、そこで論じたが、ここでのミラーの議論の特徴は節制の徳ということで、性欲の抑制の問題という角度から論じている点にある。性の問題、女性の社会的地位、家族内での女性の役割への商業の影響という問題は、ミラーに独自の問題だったわけではない。イグナティエフが注意を促したように、エディンバラの選良協会でも、ヨーロッパの啓蒙の他の中心都市でも、性の情念と商業の情念の関連は話題となった（Ignatieff [1983], 邦訳 [1990] 554ページ）。さらに言えば、欲望をいかに満足させるか、あるいは抑制するか、あるいはまた馴致・洗練・温和化するかという問題は、富（財貨）と地位への際限のない欲望、犯罪や暴力、権力欲や名誉欲のバランスをいかにとるかといった社会的問題であるとともに、半ば本能、とりわけ性欲の問題であったことは、今日では明らかであろう。スコットランド教会牧師で穏健派（モデレート知識人）の源流に位置するロバート・ウォレスは肉欲を直視し、「放蕩を防止し、結婚をより幸福にする」ために、「肉欲について、あるいは両性の交流について」というエッセイを書いた⁷⁾。ではミ

7) ノラー・スミスは、ウォレス（Robert Wallace, 1697-1771）の肉欲論に注目し、当時の恋愛、結婚、離婚をめぐる論争のコンテクストを掘り起こしたのち、農本主義的なユートピアに幸福ノ

ラーはここでどのように論じているのだろうか。

種の繁殖をもたらす本能は個人の生存に直結している食欲ほどは必要ではないし、教育の影響を受ける程度も大きい。飢えの欲求はどうしても満たさなければならないので、すべての時代、すべての国で注意の対象となるが、性欲は間隔を置いて起こるに過ぎず、かつかつの生活必需品を得ようとして絶えず奮闘している惨めな社会状態ではたいてい無視されるに違いない。このような議論から始めて、ミラーは、次に、肉食動物と狩猟民族を比較して、いつも飢えている点で、両者は共に性欲が限られていること、しかし初期時代にすでに子供を育てるために両性の結婚制度が存在すること、人間と他の動物に備わっている自然の愛情は子孫の養育のために協力するが、人間に比べて野生動物の子育ては早く完了するから、結合は長く続かないが、子育てに長くかかる人間にあっては、結合が一生続くことが適切であることなどを指摘して、結婚が生み出す社会は、優れた秩序をもった感情によって促進され、支えられるとする。

第一段階。このような「血縁関係、親子関係は相互の様々な形をとった共感と慈愛心を生み出し、……人間本性の偉大な目的に最も寄与するような方向で発揮される。人類全体に対してなしうる善は普通わずかであるが、家族の愛情を発揮するべく適切に行われる行為から生まれる利益は考えられないほど大きい。」(p. 217) 初期の社会状態では男女関係の習俗は不節制から程遠い。性の本能は人類に植えこまれた目的にちょうど見合う程度である。未開時代には性の欲望に溺れることはない。野蛮な部族で貞潔の観念が知られていないとしても、放蕩からそうなっているのではなく、個人への人格的貞節を望ましいとする原則が知られていないからである。同時に、夫婦の愛情は、子孫への愛と一緒になれば、家族を強固にすることができた、したがって政治社会の基礎とな

ゝな結婚を結び付けたユニークな思想家としてウォレスをとらえた (Smith [1978])。これはイングランドについてであるが、18世紀になると「愛情個人主義」、「友達家族」が家産制的、父権的家族支配に勝利したという興味深い解釈をストーンなどは唱えており (Stone [1977], Trumbach [1978])。それはミラーの当時の家族理解にも適合するのであるが、レミングスは、1753年のハードウィック婚姻法をめぐる議会の論戦を分析して、彼らの説が、少なくとも地主エリートにはあてはまらないと反論しており (Lemings [1996])。論争が継続している。

ることができたのであるが、しかし、それだけでは妻に尊重と地位をもたらすのに十分ではなく、妻は夫の召使あるいは奴隷となった。

第二段階。「次々進歩する生活の調度品や便宜品を生み出す、様々な技術における一国民の発展と、個人による異なった比率の財産の蓄積」が両性の関係に与える影響は二通りある。第一に、生活必需品を潤沢に供給されるような状況になれば、関心は重要性に劣るものに向かい、自らの性癖と習慣の影響から快楽を求めるようになる。第二に、個人の才能と運から発生する富の格差は、階級と身分の差異を生み出し、異なる家族を遠ざけ、家族のプライドと嫉妬を煽り、不似合いな縁組みを気遣って、放蕩や性急な結婚になりかねない親密で自由な交際を避けさせる。

さらに両性間の無差別な欲望の満足は社会の全般的改善によっても妨げられる。「趣味と生活様式の漸次的洗練」は対象の選択を向上させ、美しさや人格的な特質を持った個人を好ませるようになる。しかし、趣味の差異を大きくする事情は、恋人が願いをかなえることをより困難にもする。このような制約は快楽を改善し、喜びを大きくする。恋の成就が困難になればなるほど、価値は増す。選好基準の上昇によって稀少性が増し、それが価値を高めるというこの分析はまさに文明社会の産物である。それがヒューム、スミスの経済分析の重要な要素であったことは言うまでもない⁸⁾。

ミラーは正反対の例証を南海諸島とゲルマン民族が生み出した騎士道に求めている。南海諸島の住民は、気候に恵まれており、労働せずに生活必需品を得られるので、富の蓄積もなく、したがって、文明諸国で知られている階級区分もない。彼らは精神活動も身体活動もしないので、技術の開発によってうまれる趣味と生活様式の洗練も知らない。いつも安楽、怠惰に暮らしているので、彼らは強い官能の刺激を好む。他方、ローマ帝国を征服したゴシック諸国民では男女関係の異常な規制が見られる。広大な土地を得た彼らは分散し、多数の所領＝荘園を形成し、主権者を擁ぎ、相互には独立し、規制なき敵対と略奪を

8) ヒュームに始まる近代の稀少性概念については Xenos [1989] (邦訳 [1995]) が参考になる。

行った。このような反感と敵対の状態が数世紀続くなかで、男女関係も妨害された。その産物がロマンチックな愛であり、感情の異常な純粋さと繊細さであって、それは今なおヨーロッパの諸国民の思考、習慣、文学に痕跡をとどめている⁹⁾。

「文明社会の普通の状態はこの両極端の中間を示す。すなわち、前者の放蕩でもなければ、後者の空想的な恋愛と統制でもなく、趣味の発展に由来する穏和な快楽の感受性と、満足が通常妨げられることによるある程度の感情を伴っている状態である。」(pp. 223-224) 商業と技術が相当に発展すると、人びとは義務を履行すべき年齢に達すれば、容易に結婚するようになるが、結婚する際に、階級や資質の差異や偶然から、様々な障害にも出会うようになる。その結果、長い求愛の時期に、同じ対象に想像力が固定し、それが誠実な永続的愛着を生み出すことになる。この愛着に家庭の徳が結合するし、結婚に伴う配慮を軽く快いものにするのもこの愛着である。こうして「無軌道な欲望の熱意は優れた秩序をもった感情によって制御され、恋愛の感情は節制の保護者となる。」(p. 224)

第三に、美術や巨大な富の影響である。ミラーによれば、「奢侈と高価な生活は大きな富の自然の随伴物である。」(p. 225) 個人は富に比例して競争心に駆られて、優雅と壮麗さで勝ろうと凌ぎをけずる。その結果、収入を越えた消費をすることにもなり、家族を養うという負担を望まなくなる。男は独身を選び、女は結婚できない。共に結婚生活に幸福を見出すことができない人間になってしまう。それでも結婚しようとする人は、配偶者の個人的魅力より財産をあてにして、結婚の不便を相殺しようとする。このような金銭的動機の結婚は、「家族の幸福」に必要な調和をもたらさないであろう。

9) 騎士道については『階級区分の起源』により詳細な議論があるが、これについては田中 [1999] 55-60ページを参照されたい。アディソンについては Bloom and Bloom [1971]。ミラーはヨーロッパ人の禁欲的エートスを形成したという観点から騎士道を重視したが、ヒューム、スミスは違ったように思われる。ポーコックはパークがミラーとロバートソンの封建制＝騎士道論の影響を受けた可能性を示唆している。Pocock [1985] (邦訳 [1993] 378ページ)。

このような実例は古代ローマの帝制の初期に見られる。征服した属領から流入した莫大な富は結婚に不都合なほどの奢侈と高価な生活を生み出した。そこでアウグストゥス帝は独身生活への課税と罰則、および既婚者と多数の子供をもうけた者への報奨金によって結婚を奨励したが、結婚しない富者の間では内縁の妻をもつことが公然の普遍的な慣行となった。というのは内縁の妻の子は階級で劣ったからより少ない費用で養われたし、内縁の妻は他の点では妻と同等と見られたからである。

穏和な富をもつ国民は主に有益な技術に携わっており、そこでは住民は真面目な生業に就き、様々な部門に分かれ、広い交流ができない。近隣の家族が集まって小さな集いをもち、相互に交流する習慣となり、外部の人間とは交際しない。このような暮らしの男女は想像力を介して相互の恒常的な愛情を生み出す。娯楽や快楽に役立つ技術が発展すると、社会の異なる成員間のより広い交流が発生する。富裕な人や教養教育を受けた人はこうした交流を通して、娯楽の集まりを頻繁にもつようになる。豊かになり、作法に洗練するにつれて集まりは数多くなり、地位のある人間の交際は広がり多様化する。こうしたサークルでは女性も同等に参加し、快い才芸・教養、優雅さ、快活さなどの人間的魅力によって楽しみを増す。

このような広範な制限のない男女の交際は、注意を分散し、個々の印象を薄め、個人への強い永続的な愛着を妨げる傾向がある。心の感受性は次第に失われ、情念は官能の手段に転化する。家族社会の義務とまったく両立しない色恋と密通の精神が上流階級に導入される。富者の道楽は、自然の成り行きによって、下層身分に伝えられる。このような放蕩の進行は、富の蓄積、および奢侈と贅沢をもたらす技術が大いに進んだすべての国で観察できる。古代ローマ、アジアの大国、近代のイタリア、フランス、イングランドでは、国情に応じてそれぞれ変形されてはいるけれども、両性の交際における放蕩な習俗は大きな富の不可分の随伴物であった。

「古代ローマ人はきわめて迅速に貧困と野蛮から法外な富と奢侈へと通過し

た。したがって、この両極の間で、両性の感情を洗練し高めるにふさわしい間隔がなかったように思われる。」(pp. 230-231) 古代ローマ人は共和制末期に富裕になったとき、官能と放蕩を防止する習慣を獲得していなかった。したがって、メッサリナ¹⁰⁾の破廉恥な不品行は地位の高い女の行動と理解されたのである。

「ヨーロッパの現在の富裕な国民の場合、直前の時代の洗練された感情を残した痕跡が上流階級により優雅な種類の放縦をもたらしした。同時にキリスト教が、性的交流に関する節制、さらに禁欲の価値を高めることによって、疑いもなく、習俗の全般的弛緩を遅らせることに役立った。とくに、結婚を解消できない紐帯にしようとして発揮された教会の権威が、移り気や、悪質な気まぐれに導かれて、子供の利益と両立しない関係をもつことを、多くの場合、両親にゆるさなかった。」(pp. 231-232) しかし、離婚の禁止は、必ずしも時代精神に対抗できず、ヨーロッパの一部では制限され、また一部では無視され、フランスでは全廃された。

東洋の大国では一夫多妻制ないし一妻多夫制の慣行が、無制限の性的放蕩を生み出すのではなく、売春に敵対したとというものの、感情の洗練にも有害であった。東洋のハーレムや後宮は、最高に多様な形態の美の集まりだと言われているが、しかし傲慢な支配者に享楽を与える以外のなにものでもない。

IV 完成可能性説批判

「幾人かの仁愛の哲学者は、人類の能力と徳は学問芸術の進歩によって普遍的に改善されるという、そして人間の本性は教養と教育によって無限の完成に導かれるという嬉しい思索に耽ってきた。このようなへつらった、たぶん全般的にはよく根拠づけられた仮説に対して、いま示唆した事情は著しい例外をなすと思われる。放縦で放蕩な習俗以上に、心の優れた感情と対立するものもな

10) Messalina. ローマ皇帝クラウディウス最初の后。愛人のカイウス・シリウスと通じ陰謀を企てたことが、寵臣ナルキッスに暴露されて処刑。

ければ、社会の秩序と対立するものもなく、また人びとと結合し、相互に信頼し、安全に暮らすことを可能にする紐帯にそれほど破壊的なものはない。」(p. 233) 無限の完成可能性を主張する仁愛の哲学者の仮説は全般的によく根拠づけられていると言いながらも、ミラーはこの説を採用しているわけではない。完成可能性説はフランスのコンドルセとイングランドのハートリなどの連合心理学者の説として有名であり、スミスとミラーは意図せざる結果の論理を重視する立場から、作為あるいは立法教育による完成を展望する彼らの説を退けたことは、つとにフォーブズ (Forbes [1954]) が指摘した通りである (田中 [1988] も参照)。

男性の無差別な好色は女性らしい名誉を根絶し普遍的な売春を導入することによって、女性のいっそう重大な墮落を生み出す。その影響は子供にも及ぶ。両親に愛されずに不幸に生れる子供は、嫉妬と敵意の致命的な結果を被る。それは非嫡出子が経験する苦難を考えれば容易に想像できるであろう。「人間の子孫の教育は、また扶養でさえも、抽象的な哲学的原理から演繹される博愛あるいは仁愛に依存するのではなく、人間の行為により強力な直接の影響を及ぼす特有の情念と感情に依存するということを、自然は賢明に配慮したのであり、こうした情念が弱まり、こうした感情が破壊されるとき、人類の効用の全般的な展望あるいは立法の個々の介入によって、その代わりのものが供給されると期待しても無駄である。」(p. 234)

ミラーは家族の紐帯をかけがえのないものと考えた。『階級区分の起源』では、すでにミラーの時代には、一部の女性が束縛からすっかり解放され放縱になる傾向があるとして、女性のモラルを問題にしていた。独身者ヒュームやスミスと違って、ミラーは家族の愛、親子の親愛といったものに強い関心と重要な意味を見出していたと言えるかもしれない。しかし、文明のもたらす富や奢侈は性的放蕩、売春、非嫡出子を生み出すことも事実である。それをミラーは個人のモラルに訴える他にないと見ている。この問題に関して、ミラーは博愛や仁愛にも期待するところは少ないし、奢侈禁止法や売春禁止法などの立法に

も期待しなかった。ミラーは個人の自然の感情に訴えることに終始した。

このようなミラーの見解には時代の刻印が濃厚に感じられる。スミスの法学講義の正義論は公法と私法に区分されるのではなく、公法、家族法、私法という三分法を採っていた。単婚核家族とはいえ、しばしば奉公人を家族として擁していたこの時代の大ブリテンの家族は、社会の単位として、今日より遥かに重要な機能を果たしていたことを想起すべきであろう。しかし、ミラーはもはやスミスの三分法を踏襲してはいない。『階級区分の起源』は夫と妻、親と子、主人と召使という家族関係を重視した著作であるが、ミラーの視点はそれぞれの支配―隷従関係が文明の発展によっていかに変容し、自由化してきたかという自由の歴史、個人の独立の歴史に据えられている。やがてメイン (Maine, Sir Henry, 1822-1888) は「身分から階級へ」という関係の変容を説くが、ミラーはこのような家族から個人へとというベクトルを否定できないものと見ていた。このように家族でさえより自由な関係に向かって変容してきたにもかかわらず、ミラーは家族の解体を支持したとは言えない。その意味ではミラーはまったく個人主義に徹することができたわけではない。しかし、ミラーが重視する家族の紐帯は愛情と配慮による紐帯であって、人格として個人が自立できるための支柱、セーフティ・ネットとして家族を重視していたということも確かである。

ミラーは、以上のような節制論の次に「正義と寛大」へと議論を進めるが、紙数の関係で、それは次稿に委ねることにする。

参考文献

- Berry, C. [1997] *Social Theory of the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U. P.
Bloom, E. A. and L. D. Bloom [1971] *Joseph Addison's Sociable Animal*, Brown U. P.
Fletcher, F. T. H. [1939] *Montesquieu and English Politics (1750-1800)*, London.
Forbes, D. [1954] "Scientific Whiggism: Adam Smith and John Millar" in *Cambridge Journal*, 7, later in *Adam Smith, Critical Assessments*, ed. by J. C. Wood,

Vol. 1, London, 1984.

Hume, D. [1994] *Political Essays*, ed. by K. Haakonssen, Cambridge U. P.

Ignatieff, M. [1983] "The Individualism of John Millar" in *Wealth and Virtue*, Cambridge U. P. (水田洋・杉山忠平監訳 [1990] 『富と徳』 未来社)。

Lemings, D. [1996] "Marriage and the Law in the Eighteenth Century: Hardwick's Marriage Act of 1753," *Historical Journal*, 39-2.

Millar, J. [1794] *Lectures on the Institutions of the Civil law by Professor Millar*. (EUL)

—— [1803] *Historical View of the British Government*, Vol. 4, London.

Pocock, J. G. A. [1985] *Virtue, Commerce and History*, Cambridge U. P. (田中秀夫訳 [1993] 『徳・商業・歴史』 みすず書房)。

Smith, N. [1978] "Sexual Mores in the Eighteenth Century: Robert Wallace's "Of Venery," *JHI*, 39-3.

Stone, L. [1977] *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*, London.

Trumbach, R. [1978] *The Rise of the Egalitarian Family: Aristocratic Kinship and Domestic Relations in Eighteenth-Century England*, New York.

Xenos, N. [1989] *Scarcity and Modernity*, London. (北村和夫, 北村三子訳『稀少性と欲望の近代』新曜社, 1995年)。

坂本達哉 [1995] 『ヒュームの文明社会——勤労・知識・自由——』創文社。

田中秀夫 [1988] 「ジョン・ミラーにおける『科学』と『政治』」『甲南経済学論集』第28巻第4号。

—— [1991] 『スコットランド啓蒙思想史研究——文明社会と国制——』名古屋大学出版会。

—— [1996] 『文明社会と公共精神——スコットランド啓蒙の地層——』昭和堂。

—— [1999] 『啓蒙と改革——ジョン・ミラー研究——』名古屋大学出版会。